

### 3. 爬虫類

#### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

日本で知られている爬虫類は、カメ目 15 種、有鱗目トカゲ亜目 46 種、有鱗目ヘビ亜目 47 種（日本爬虫両棲類学会ホームページ、2017 年 10 月 1 日現在）である。この中には国外外来種も含まれている。近年、日本各地でカミツキガメの生息確認の報告があり、静岡県でも県東部で生息と繁殖の確認の報告があるため生息種に加えた。また 2006 年磐田市の天竜川東部の一部地域でスウィンホーキノボリトカゲの定着が確認され、駆除作業により一時見られなくなったが、2017 年には、同地区で頻繁に確認されている。これらを考慮すると、静岡県に生息する爬虫類は、カメ目 6 種、有鱗目トカゲ亜目 5 種、有鱗目ヘビ亜目 8 種となり、日本全体と比べるとその比率はカメ目 40 %、トカゲ亜目 10.9%、ヘビ亜目 17 %になる。

#### (2) 調査の概要

RDB 作成のための基礎データは野外調査と室内調査によって集積した。野外調査では県内のできるだけ多くの地域を踏査し、新産地の発見と既知の産地での現況確認に努めた。また、ヒガシニホントカゲとオカダトカゲの分布の境界と考えられる交雑個体がみられる地域では、広範囲でのサンプリングと DNA 解析を行った。他のいくつかの種についても DNA 解析のための組織サンプルをできるだけ多くの地点で収集するよう努力した。

#### (3) レッドリスト種の選定経緯

前回（2004 年）の県内爬虫類目録掲載種に加え、今回新たに生息確認された 2 種を含め、県内確認目録の爬虫類 19 種の中から、外来種 3 種を除外して、調査結果や生息状況を加味し、16 種を RDB の対象として検討した。前回（2004 年）のレッドリスト種については、その後の状況を検討し、一部ランクを修正した。

#### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は、前回（2004 年）の 7 種に対し、今回は 8 種で、1 種（ニホンイシガメ）の増加があった。また、絶滅のおそれのある種の総数は、前回（2004 年）同様、今回もアカウミガメ 1 種のみである。一方、将来絶滅のおそれのある種となる可能性の高い準絶滅危惧は前回より 1 種増加している。

#### (5) 減少の主要因と脅威

淡水生カメ類の減少は河川改修によるものが多いと考えられる。洪水による被害防止の為に、より強固で画一的なコンクリート護岸の設置と、流木防止のための河畔林の皆伐により生息の要所である淵やワンドが消失してしまうのである。また国外外来種のミシシippアカミミガメの増加により、在来種は餌と住みかを奪われている。しかし、一番心配されるのは海産のアカウミガメで、海岸線の砂浜が消失し、産卵環境が急激に減少していることである。ダム建設や河川の砂利採取により砂の供給が少なくなったことが原因であるが、分量は少ないといっても現在も安倍川、藁科川で行われていることは驚きとともに脅威である。

ヘビ類の一部は、餌となるカエルの減少により個体数が減少していると考えられるが、個体数推定は困難で正確な数字は把握できていない。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

ニホンイシガメが準絶滅危惧に指定されたが、河川水辺の国勢調査のデータからも捕獲箇所、個体数の減少が見てとれる。たとえば、春季の日光浴の観察結果ではニホンイシガメの記録は消え、ほとんどがミシシippアカミミガメにすり替わっているのである。また、「ウンキウ」や「イシクサガメ」と呼ばれるクサガメとの交雑個体を確認されているが、ニホンイシガメの個体数が減少する中、遺伝的な汚染も深刻な問題である。

### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

近年頻発する豪雨災害と、想定される東海沖地震・東南海沖地震の対策として今までにない規模の河川改修が計画され進行しつつある。また、浜松海岸には巨大な防潮堤が作られているが、他の市の海岸線にも建設要望が上がってくることは必至であろう。工事を回避することはできないため、大きな河川では高水敷地に繁殖や生息できる場所を創出することが重要である。浜松海岸の防潮堤建設に際しては、考え得る保全対策を提案し、採用されてきたが、今後開始される工事についても同様に保全対策を行う必要がある。浜松の防潮堤では天竜区から建設用土砂を運んでいるが、この土砂採取地にも貴重動植物が生息していたため、別途、保全対策を行っている。将来に向け健全な自然環境を残すことが責務である。

### (8) 文献（多くの種で参考とした文献）

関慎太郎（2016）野外観察のための日本産爬虫類図鑑。緑書房，東京，207 pp.

（國領康弘）

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

### 1. 種の解説

甲長 80～90 cm。背面は頭部や四肢を含めて褐色で、腹面は淡い黄褐色を呈する。ウミガメ類の中では相対的に頭部が大きく顎の力が強い。これは固い貝などの底生動物を餌とするためだと考えられている。5月下旬より産卵が始まり8月中旬まで続く。1回の産卵で100～120個程度の卵を産み、1シーズンに複数回産卵する。孵化する子ガメの甲長は4 cmで、黒褐色。

### 2. 分布

インド洋、太平洋、大西洋、地中海の水温 15℃以上の海域に分布する。それぞれの大洋において、暖流が近くを流れる砂浜海岸に上陸して産卵するが、北太平洋の産卵場は沖縄から関東地方までの外海に面した砂浜のみに限られる。県内では湖西市・新居町・浜松市から御前崎市・牧之原市にかけての砂浜、また伊豆半島の小規模な砂浜でも産卵する。

### 3. 生息環境

孵化した幼体は黒潮・北太平洋海流によって北太平洋あるいはカリフォルニア半島の沖まで流される。その後、直甲長が 60 cm を超えると日本沿岸に戻ってくる。日本の南方海上では、黒潮を利用しながら回遊するが東シナ海で定着する個体もいる。産卵する海岸は外洋に面して、黒潮の流れる太平洋岸に多い。

### 4. 生息状況

静岡県における年間の産卵回数は1990年代より、数百回から1,000回の間で変化している。産卵回数は1,000回を超えることはないことから、毎年の産卵個体数は数百個体と予想される。九州南部など多くの産卵地では1998年以降増加傾向にあるが、静岡県の場合はその傾向は認められない。

### 5. 減少の主要因と脅威

一般的には定置網漁と延縄漁などによる混獲が最大の脅威と考えられている(41)。また、静岡県では卵を孵化場で管理し、幼体が人為的に放流される傾向がある(71)。これが減少の要因となっている可能性も高い。

### 6. 保護対策

御前崎市では砂浜の砂の侵食が激しく、自然の産卵巣は波で冠水する可能性が高い。そのために陸域に孵化場をつくり孵化させている。また、浜松市やその東側でも卵は浜松市の孵化場に移植されているが、多くの卵は自然孵化する状態にあると考えられ、移植が保護になっているのが疑問視されている。

### 7. 特記事項

北太平洋の個体群の産卵地は日本に限定されている。

### 8. 主な文献

亀崎直樹 監修 (2012) ウミガメの自然誌. 東京大学出版会, 東京, 307 pp.

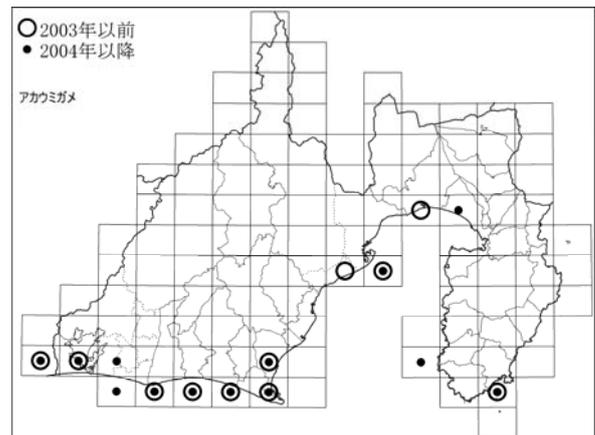
環境省自然環境局・日本ウミガメ協議会 (2006) ウミガメ保護ハンドブック. 環境省, 34 pp.

### 9. 標本

ふじのくに地球自然史ミュージアム



©2019 A.Yamamoto  
牧之原市相良 2005年7月27日 山本明男



(亀崎直樹)

# ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck & Schlegel, 1835)

イシガメ科 Geoemydidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

甲長 13~20 cm。オスは小さく、メスの甲長の 2/3 くらいである。甲羅の椎甲板には隆起があり、甲羅後縁は鋸歯状だが、老齢個体では摩耗して不明瞭となる。背甲は黄褐色で、腹甲は黒色である。頭部はクサガメに比べ小さく暗黄色で、側頭部には黒い斑紋がある。幼体の甲羅は扁平で、後方の縁甲板には突起が 2 つある。尾は長く、甲羅の長さの 3/4 ほどを占めるが、成長とともにその割合は小さくなる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐諸島、五島列島、対馬、淡路島、壱岐、佐渡島に分布する。県内では天竜川や瀬戸川、安倍川、巴川、狩野川、青野川など主要水系の他、浜名湖や佐鳴湖につながる河川などで各地で記録されている。

## 3. 生息環境

山間部の谷川から中流域、下流域までの流水域で透明度が高い河川を好むが、水田や池沼、湿原でも見られる。川底が礫質で、日光浴に適した土手や石がある環境を好む。夏季は谷川から水田やため池に移動することもある。

## 4. 生息状況

県内に広く分布し、低地から丘陵地まで生息が確認されている。個体数は、中部及び東部で減少傾向にあり、特に伊豆半島では個体数が少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の個体数減少は、コンクリート垂直護岸による陸地への移動と繁殖の阻害 (13、15-2) のほか、愛玩飼養や商業目的による乱獲 (41) が原因と考えられる。また、外来カメ類との競合や交雑による遺伝子汚染 (56-1、57-1) の進行が危惧される。

## 6. 保護対策

2013 年にワシントン条約附属書 II に掲載され、輸出が規制された。背甲長 8 cm 以上の野生個体は輸出禁止となったが、国内においては流通に規制はなく、野生個体の搾取と販売が続いている。各地で外来カメ類を取り除く活動は進んでいるが、本種の保護を目的とした特別な対策はとられていない。

## 7. 特記事項

静岡県を含む国内各地でクサガメとの交雑が確認されており、遺伝子汚染の現状を把握するとともに保護のための対策が必要とされる。

## 8. 主な文献

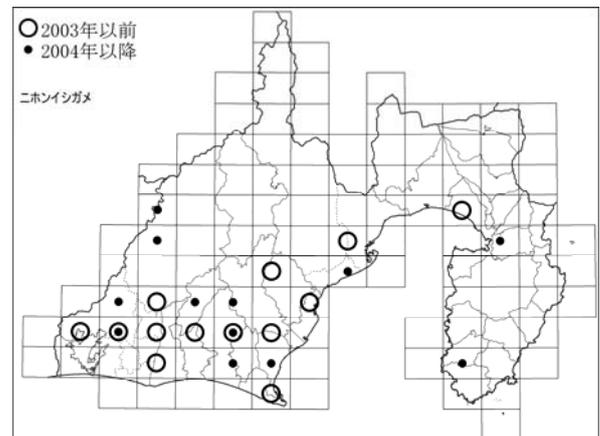
Kato, H., K. Kishida, T. Sasanami, N. Kansaku, H. Etoh & M. Toriyama (2010) Detection of Hybrid Individuals between *Mauremys japonica* and *Chinemys reevesii* by RAPD. *Biogeography*, 12: 39-42

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



狩野川 2006年3月11日 加藤英明



(加藤英明)

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

甲長 20~40 cm。本草綱目啓蒙に琵琶湖に径二尺のものがいるとあるので、甲長 60 cm に近いものもいるかも知れない。甲は丸く、滑らかに皮膚に覆われる。背面はオリーブ~灰色で、暗色の斑点が散在することもある。腹面は白い。手足には水かきが発達しており、第 1~3 指に爪がある。鼻孔の先端は突出しており、頸が長く伸びる。

## 2. 分布

国外では台湾、朝鮮半島、ロシア沿海州、中国東北部から東南部、ベトナムまで、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。琉球列島では、奄美諸島には日本列島から、八重山・宮古諸島、沖縄諸島には台湾から移入された。食用のため、東南アジア、ハワイ諸島などにも移入され定着している。県内では浜松市、掛川市、榛原郡吉田町、焼津市、静岡市、沼津市、下田市から記録がある。他のカメ類に比べると目撃されにくい種なので、他の河川にも生息している可能性は高い。

## 3. 生息環境

河川の中・下流域や、池、沼に生息する。

## 4. 生息状況

大きな河川の中流から下流域で観察される。繁殖期に農業用水路などを伝って田んぼの畔に産卵することがあり、10 数個体が集まっていたのが観察された。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川の護岸工事、水路のコンクリート 3 面化により産卵場所が減少している (13、15-2)。また、水質の汚濁により生息環境は悪化している (31)。

## 6. 保護対策

河川改修の際、産卵できる環境を残し、ニホンスッポンが登ることができる護岸にすることが望ましい。

## 7. 特記事項

養殖は主に養殖場近くで得られた日本産のものを選んで行われているが、中国産が輸入され、逃げ出したものなどが定着、日本産と交雑を起こしているという報告もある。中国産を別種とする研究者もおり、注意が必要である。中国産は甲が縦長で、甲の丸い日本産と区別ができる。しかし、交雑個体の判別は形態では不可能である。

## 8. 主な文献

大田英利 (2014) 日本に見られるスッポン個体群の起源について. 亀楽, (7): 6

佐藤寛之・吉野哲夫・太田英利 (1997) 沖縄県内の島嶼におけるスッポン (*Pelodiscus sinensis*) (爬虫綱, カメ目) の起源と分布の現状について. 沖縄生物学会誌, 35: 19-26

Suzuki, D. & T. Hikida (2014) Taxonomic status of the soft-shell turtle populations in Japan: A molecular approach. Current Herpetology, 33(2): 171-179

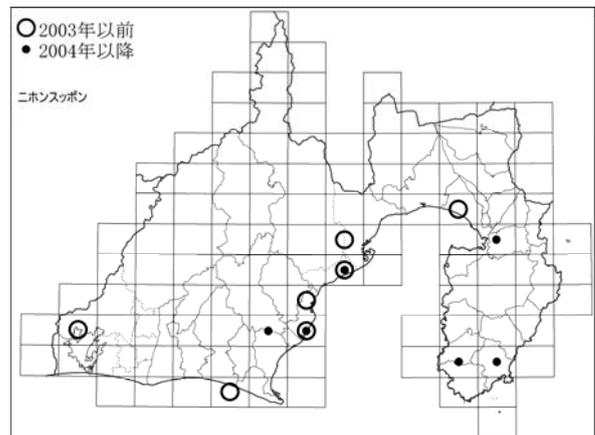
安川雄一郎 (2016) スッポン科の分類と自然史 6. クリーパー Creeper, (76): 1-20

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



浜松市南区 2016年7月12日 加藤健一



(疋田 努)

# シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)

ナミヘビ科 Colubridae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長 30~70 cm。頭部の背面は黒く、背面の地色は桃色がかった淡褐色や褐色、灰褐色で、黒褐色の横帯がある。似た模様のアオダイショウの幼蛇が本種と誤認されることがある。主に小型の爬虫類を捕食する。静岡県に分布する種では、ヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビ、ヒバカリ、タカチホヘビなどが記録されている。ヒガシニホントカゲの卵を食べた例があり、爬虫類の卵も食べるのであろう。記録はないがニホンヤモリも捕食される可能性がある。6~8月に1~9個の卵を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州と周辺の島嶼に分布する。県内では伊東市、熱海市、駿東郡愛鷹山、富士宮市朝霧高原、静岡市、焼津市、牧之原市、袋井市から記録されている。

## 3. 生息環境

山地から平地にまで生息している。主な餌であるヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビが生息する場所が生息環境であろう。昼間は石や倒木の下などに隠れる。また、最近の観察で、本種が壁を登ることができることが明らかになったため、樹洞などに潜んでいる可能性もある。

## 4. 生息状況

夜行性で目撃の難しい種であるために、生息状況についての情報が得られていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な餌であるヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビの生息地が減少すると、シロマダラの生息地も減少することになる(71)。本調査では、2004年より前の古い記録の場所で生息が確認できていないので、これらの場所で生息数が減少している可能性がある。

## 6. 保護対策

生活史、生息状況などの情報を収集することが必要である。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

浜中京介・森 哲・森口 一 (2014) 日本産ヘビ類の食性に関する文献調査. 爬虫両棲類学会報, 2014(2): 167-181

前澤勝典 (2016) シロマダラの棲む小屋. 爬虫両棲類学会報, 2016(2): 111-114

大野正男 (1989) シロマダラに関する知見総説. 日本の生物, 3(8): 52-60

関慎太郎 (2016) 野外観察のための日本産爬虫類図鑑. 緑書房, 東京, 207 pp.

照井滋晴 (2014) 福島県南相馬市で確認されたシロマダラ (*Dinodon orientale*) の隠れ家. 爬虫両棲類学会報, 2014(2): 89-92

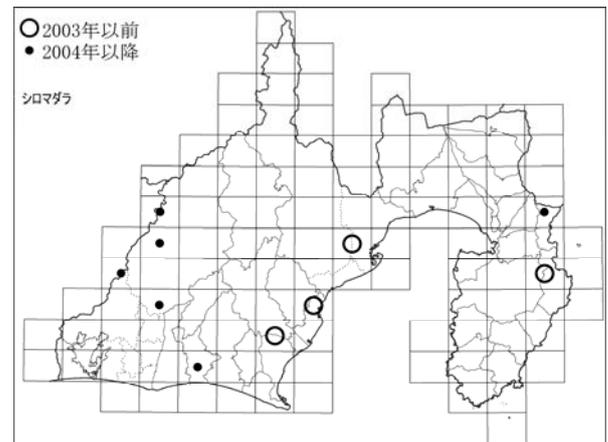
徳田龍弘 (2015) 改訂版北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑. 北海道新聞社, 札幌, 95 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



周智郡森町小国神社 2006年11月3日 國領康弘



(疋田 努)

# ヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* Okamoto & Hikida, 2012

(=2004年版のニホントカゲ)

トカゲ科 Scincidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 5.5~7.0 cm。胴中央部の体鱗数は普通 26 列(24~28 列)である。小さな後鼻板が上唇板に接する。後鼻板がない個体も少数いる。幼体と若いメスは尾が青く、黒い背面に 5 本の明るい縦条が走り、正中の縦条は頭頂部で二叉する。成体オスや老熟メスでは体側の黒褐色の縦筋を残して褐色となる。繁殖期は 4~5 月で、繁殖期のオスは頭部とのがオレンジ色になる。巣穴で産卵したメスは孵化まで卵の世話をする。

## 2. 分布

国外ではロシア沿海州、国内では伊豆半島を除く近畿地方以東の本州、北海道に分布する。県内ではオカダトカゲと分布を接しており、富士川河口右岸以西、富士宮市の北西部、駿東郡小山町と御殿場市北縁に分布する。

## 3. 生息環境

海岸付近の低地から高山にまで分布しており、人家周辺にも生息している。春先には日光浴によって体温を上げるので、日光浴に適した開けた場所があり、さらに採餌のための草むらがある場所で、よく見られる。石垣や積まれたがれきなどを隠れ場所としている。

## 4. 生息状況

伊豆半島地域に分布するオカダトカゲと比べると密度は低い。人家周辺にも生息するが、石垣などがコンクリート化されると、隠れ場所が失われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

特定外来生物などの侵入により捕食圧が高まることは脅威である(52-3)。近年、駿府城公園、藤枝市蓮華寺池公園、大井川野鳥公園などに大量の捨てネコが生息しているが、トカゲ、ヘビなどの姿を見ることがなくなった。捕食されていると考えられる。

## 6. 保護対策

開発行為が行われた際、法的に必要な緑地帯や調整池に生息環境を作ることなどが考えられる。

## 7. 特記事項

日本列島にはニホントカゲ 1 種だけが、広く分布すると考えられてきたが、遺伝的な地理的変異を調べた結果、2012 年に新種記載された。遺伝的解析により本種とオカダトカゲとの交雑個体が静岡市清水区、富士市富士川町、富士宮市、裾野市、御殿場市、駿東郡小山町で確認された。

## 8. 主な文献

Motokawa, J. & T. Hikida (2003) Genetic variation and differentiation in the Japanese five-lined skink, *Eumeces latiscutatus* (Reptilia: Squamata). *Zoological Science*, 20(1): 97-106

Okamoto, T. & T. Hikida (2009) Three genetic lineages of the Japanese skink *Plestiodon japonicus* (Scincidae, Squamata) and the genetic composition of their contact zones. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research*, 47(2): 181-188

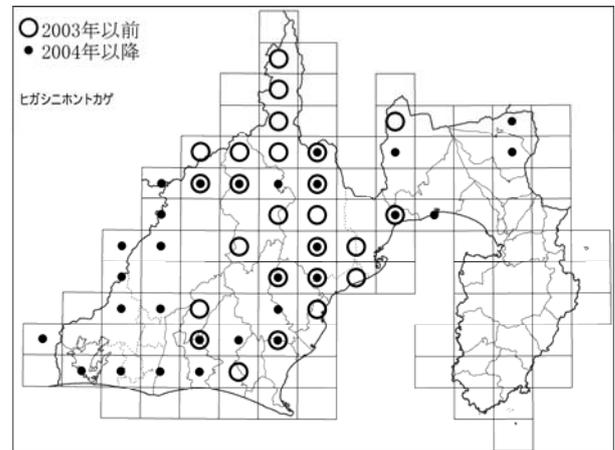
Okamoto, T. & T. Hikida (2012) A new cryptic species allied to *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. *Zootaxa*, 3436: 1-23

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



©2019 K.Kato  
静岡市清水区 2016年9月15日 加藤健一



(疋田 努)

# オカダトカゲ *Plestiodon latiscutatus* Hallowell, 1861

トカゲ科 Scincidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等):環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
(静岡県該当なし)]

## 1. 種の解説

頭胴長は6~9 cm。胴中央部の体鱗列数は24~26列である。後鼻板はないか、前頬板により上唇板から隔てられる。小さな後鼻板が上唇板に接するものは少数である。体色は幼体と若いメスは尾が青く、背面は黒褐色で5本の明るい縦条が走り、正中の縦条は頭頂部で二叉する。成体オスと老熟メスは黒い体側の縦筋を残して褐色になる。繁殖期は4~5月で、繁殖期のオスは頭部とのどから腹面全体がオレンジ色になる。巣穴で産卵したメスは孵化まで卵の世話をする。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆半島周辺と初島、伊豆諸島に分布する。静岡県では富士山の東部の御殿場市まで、富士山の西側は富士宮市の中中部までである。ヒガシニホントカゲとの境界は、東は酒匂川、西は富士川の河口部、北は富士山の南麓である。

## 3. 生息環境

海岸から標高約2,000 mの高地まで生息する。畑や人家周辺にも多く生息している。

## 4. 生息状況

ヒガシニホントカゲよりも生息密度は高い。

## 5. 減少の主要因と脅威

伊豆半島とその周辺は本州における唯一の分布地域なので、チョウセンイタチやアライグマなど外来捕食者が定着すれば(52-3)、生息状況の監視が必要である。

## 6. 保護対策

今のところ特に保護対策は必要ない。

## 7. 特記事項

遺伝的解析により本種とヒガシニホントカゲとの交雑個体が静岡市清水区、富士市富士川町、富士宮市、裾野市、御殿場市、駿東郡小山町で確認された。

## 8. 主な文献

Brandley, M. C., T. Kuriyama & M. Hasegawa (2014) Snake and bird predation drive the repeated convergent evolution of correlated life history traits and phenotype in the Izu Island skink lizard (*Plestiodon latiscutatus*). *PLoS One*, 9(3): e92233

Motokawa, J. & T. Hikida (2003) Genetic variation and differentiation in the Japanese five-lined skink, *Eumeces latiscutatus* (Reptilia: Squamata). *Zoological Science*, 20(1): 97-106

Okamoto, T. & T. Hikida (2009) Three genetic lineages of the Japanese skink *Plestiodon japonicus* (Scincidae, Squamata) and the genetic composition of their contact zones. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research*, 47(2): 181-188

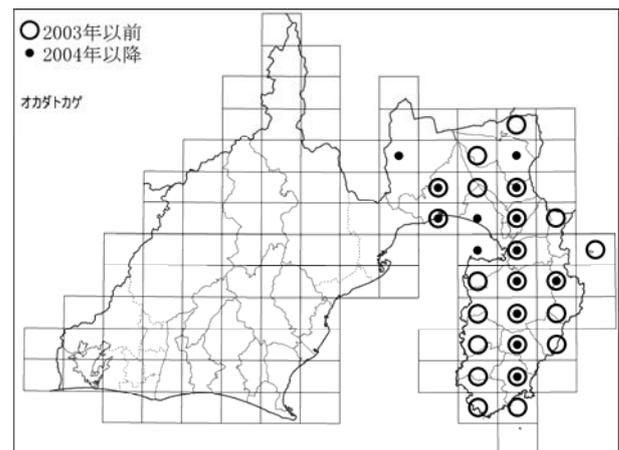
Okamoto, T. & T. Hikida (2012) A new cryptic species allied to *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. *Zootaxa*, 3436: 1-23

## 9. 標本

京都大学総合博物館



沼津市下香貫 2016年5月31日 國領康弘



(疋田 努)

# クサガメ *Mauremys reevesii* (Gray, 1831)

イシガメ科 Geoemydidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

甲長 20~24 cm。オスは小さく、メスの甲長の 2/3 くらいである。甲羅は俵型で、椎甲板と肋甲板に隆起があり、甲羅後縁は滑らかである。背甲は黒色または褐色で、腹甲は黒色で甲板の継ぎ目は黄白色である。頭部は大きく、黒色や暗褐色で、側頭部には黄白色の縦条や不規則な斑紋がある。成体のオスは、虹彩を含めた体全体が黒化する。危険を感じると、体側の臭腺から臭いのある液を分泌する。

## 2. 分布

国外では韓国、中国、台湾、国内では北海道南西部から本州、四国、九州、佐渡島、淡路島、壱岐、隠岐、対馬、五島列島、奄美大島、沖縄島、久米島などに分布する。県内では西部から東部まで広く分布し、伊豆半島の南伊豆町でも確認されている。

## 3. 生息環境

低地の河川や池沼などに生息し、流れが緩やかで濁りのある底質が泥の環境を好む。水田と周辺の水路にも生息し、特に公園の池や住宅地周辺の水辺では数多く確認されている。

## 4. 生息状況

池沼における個体数は増加している一方、河川では垂直コンクリート護岸が繁殖の妨げとなっている。本種は水質が悪化した環境に耐えるため、住宅地を流れる河川や排水溝でも生息が確認されており、個体数は市街地周辺の水辺で多い傾向がある。愛玩用に数多く流通しており、それらが野外に侵入することで、人為的に拡散して分布域を広げている。

## 5. 減少の主要因と脅威

国外では、乱獲による個体数の減少により絶滅が危惧されている。国内のものは過去に人為的に持ち込まれた移入個体と考えられ、県内各地で日本固有種であるニホンイシガメや、国内外から持ち込まれたミナミイシガメとの交雑個体が野外で確認されており、遺伝子汚染による種の消失が危惧される(57-1、57-2)。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

遺伝子汚染の程度を調査するとともに、交雑個体を野外から取り除く必要がある。

## 8. 主な文献

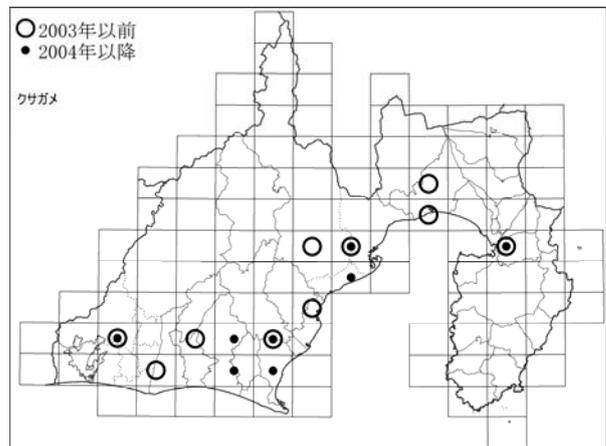
Suzuki D., H. Ota, H. -S. Oh & T. Hikida (2011) Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2): 237-249

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 H.Kato  
静岡市 2017年 加藤英明



(加藤英明)

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長 10～14 cm。体は扁平で、細かい粒状鱗に覆われ大型の粒状鱗が散在する。前後肢とも第1指の爪を欠く。指下板は2つに分かれず下面全域を覆い、その先端の細かな鉤状の突起を引っ掛けることで垂直なガラスを登ることができる。尾の基部には2～4対の大型鱗があり、オスは前肛孔を6～9個もつ。

### 2. 分布

国外では韓国、中国、国内では秋田県以南の本州、四国、九州、対馬などに分布する。県内では西部から東部までの低地と丘陵地に広く分布するが、内陸部の高地では見られない。伊豆半島の西部では記録がない。

### 3. 生息環境

主に民家の周辺に生息し、壁や木材の隙間に住む。夜行性で明かりに集まる虫を捕食するため、電灯や民家の窓に度々出現する。越冬や産卵に適した隙間を必要とし、木造の住宅や薪などの木材が置かれた環境を好む。

### 4. 生息状況

県内では森林周辺の住宅地で個体数が増加傾向にあり、新しい住宅地でも確認されている。廃屋では数多くの個体が確認されており、沿岸部から山間部までの家屋周辺に生息している。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の定着には、越冬や産卵に適した隙間が必要であり、木造の住宅や薪などの木材が置かれた環境が消える(18)ことで、個体数が減少すると考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

人間の生活が大きく影響し、建築資材などに紛れて人為的に拡散する。県外では日本固有のタワヤモリとの交雑が確認されており、非意図的な移動を防ぐ必要がある。ニホンヤモリは国外由来の外来生物として扱われることがある。

### 8. 主な文献

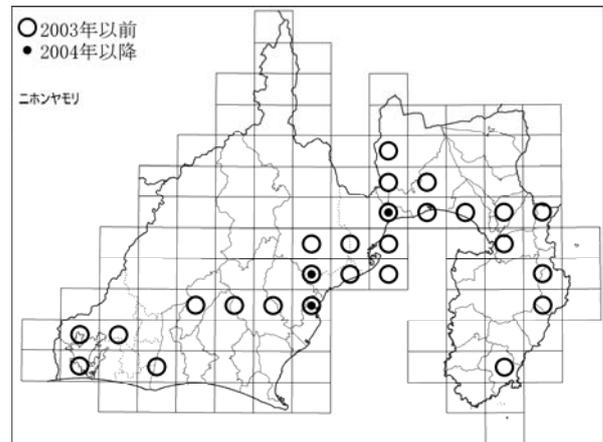
Toda, M., S. Okada, T. Hikida & H. Ota (2006) Extensive natural hybridization between two geckos, *Gekko tawaensis* and *Gekko japonicus* (Reptilia: Squamata), throughout their broad sympatric area. *Biochem Genet*, 44: 1-17

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 H. Kato  
静岡市 2017年 加藤英明



(加藤英明)